
助けてください。

ハルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

助けてください。

【Nコード】

N3439Y

【作者名】

ハルカ

【あらすじ】

何かに本気で取り組む時。そんな時に限って不幸になる私。でも、憧れの大学生活も始まったし、これからの人生は幸せが待っているはず。

じゃあ、幸せになるために、まずは人生初めての彼氏でも作ってみよう。

なんて気合い入れたせいか、とんでもないもの（人）を引っかけてしまった。

いや、あなたは私には荷が重すぎるのでスルーさせていただきます。
ついてこないで。物陰からこっちを見ないで。私の愛用品をこっそ
り持っていかないで。

てか、誰か助けてください。

思えば、私って昔からついてなかったと思う。

…いや、運がだよ。道歩いてて上から鳥の〇〇がっつてのはあったけど…おにゅーの服がぐしゃどろになってめちゃくちゃへこんだけど…って、そっちじゃなくて、ラックの方。

幼稚園の時は、遠足で楽しみにしてたお弁当に毛虫落ちてきて、ひっくり返しておじゃん。

小学校の時は、マラソン大会で何故か車にひかれそうになるし。(ほぼ毎年)修学旅行では迷子になるし。

中学校の時は試験前に必ず愛用のシャーペンが紛失or破損。修学旅行では迷子になるし。(2回目)

高校の時は張り切って作った手作りチョコをこけた拍子に側溝にポイ捨て。(ちなみに、友チヨコ)修学旅行では迷子になるし(3回目)

そして1番不幸だったのが大学受験の時。その日に限って目覚まし時計が壊れて、遅刻しそうな中、死に物狂いで受験会場へ。

大学受かったのが、嘘みたいだった。絶対落ちると思ってたし。ついてない事ばかりだけど、神様は頑張る私を見ていてくれたんだ！今まではついてなかったけど、これからはバラ色の人生が待ってるんだ。私は、そう信じて疑わなかった。

だって、念願の1人暮らしだし。憧れの大学に入れたし。親友も一緒にの大学に受かったし。うん、言うことなし。楽しい明日が待って

るぜ！

「なーんて、やっぱり私の人生上手くいかないもんだね」

ずずー。適度に混んだマツ〇でコーラをすする様に飲む。

「やめなさい。バカっぽいから」

「だってー…」

私の前でハンバーガーをパクつく幼稚園からの親友。（幼馴染みでもある）

艶々の茶髪を綺麗に巻いて、バッチリメイクにスラッとした体。

彼女は佐々木 唯。不幸体質の私を影から日向から支え続けてくれる姉御肌の美人さん。

私にお弁当半分わけてくれたり、突っ込んでくる車から助けてくれたり（私を蹴り飛ばして）、代わりの友チョコ買ってお金貸してくれたり、毎回シャーペン貸してくれたり迷子の私を探しだしてくれたり。

…もう本当に、唯様々です。

唯は私にとって、女神と言っても過言じゃない。

助けられまくり。唯的には、私は「出来の悪い妹」らしい。…姉さん、あざっす。

でも、私ももう大学生だし。唯に心配と迷惑ばかりかけられるのも申し訳ないって思うし。ここで独り立ちをしなければ、なんて考えた。…遅いかもだけど。

それで、唯に大人になったねって言わせて、安心してもらうのだ。

その為に、唯に相談中。

「私から自立しなきゃって考えは良いと思うよ、知恵里。でも、なんで彼氏作りが独り立ちなのよ」

訳解らん、って全力で語ってるよその顔。

「だって、『大人の女』って彼氏の1人や2人や3人いるものじゃん」

「…知恵里の言う『大人の女』、激しく間違ってるでしょ。良い女はたった1人を深く愛するものよ」

「じゃあ1人にする」

「……」

あんだ、バカ？って全力で語ってるよその目。

「やめときなよ。知恵里が本気で頑張る時って、何かしら起きるんだから」

さすが、女神はわかっていらっしやる。めちやくちや気合い入れた時とかやる気出した時に限って、不幸が起こるんだよね。

「でも今のところ、何にも不幸になってないし」

にへつと笑う。

「甘いわね。本気で彼氏作ろうって思ってたないからよ」

ふふん、と鼻笑う唯。不適な笑みがすんごく似合ってるし。

「すんごく気合い入ってるんだけどなー。毎日化粧して、スカートはいて、かかとの高い靴はいてるし」

「それ、だいたいの子の標準装備だと思うけど」

「……」

私的には、めちゃくちゃ頑張ってるつもりなの。女神の唯様の女子力には遠く及ばなくとも。

「どっかに彼氏落ちてないかな……」

ずぞぞー

「バカにしか見えないから、変な事言つのやめなさい」

ハンバーガーを食べ終わった唯に引っ張られて、渋々店を後にした。

「ありがとうございましたー」

やる気ないような店員の声に見送られて、自動ドアがしまった瞬間。

何故か、ほっと息をついた。

「何、あからさまな溜め息」

眉を寄せる唯。地獄耳だし。

「なんだか、店の中で変な視線感じてさ。また唯狙いのおじ様の熱い視線かな」

「私は何も感じなかったけど？」

「多分慣れてるからでしょ」

「バカね、知恵里よりは鋭いんだから。何回あんたを色んなものから助けたと思ってるの」

「感謝感激雨あられ…」

「それ懐かしくない？…まあ、気のせいでしょ。にぶちんの知恵里が気づいて、私が気づかないなんて有り得ないし。」

「

「ういーむっしゅ」

「……」

気のせい。その言葉に安心してしまっていた。

私が本気出した時の不幸、舐めてたかも…

新歓オリエンテーションが終わって、やっと説明やら勧誘やらから解放された。ちなみに、晩ごはんも一緒に！って私の腕を掴んで駆け出そうとする唯をやつとの思いで振り切り、1人とぼとぼと帰路についた。

いや、色々な事あつて疲れたからさ。ちょっと1人になりたくて。

「疲れた…」

アパートまでの徒歩15分が長く感じる。ちえっ、今度自転車でも買おうかな。

……ん？

視線を感じる。

ちらっ

足を止めて振り返ると、さっき曲がった電柱のある曲がり角に、黒い影。

ちょうどよく、逆光になって何がいるのか見えない。人だってのはシルエットでわかるけど。

………えっ。

まあ、気のせいかな。うん。……早く帰ろう。

サカサカと早くなる両手足。まるでゴキ〇リみたいな私。

ちよつと歩いて、またちらつと見ると、しゅばつと何か（誰か）が動いた。

……えっ。

やばい。不審者だろうか…私みたいな平凡でも、襲う気になるの？

さーっと血が引いていく。やばい、逃げなきゃ。

一目散に駆け出す。ともかく、逃げなきゃって事しか頭にない。

後ろから、何かも追ってくる気配がする。怖い。なんで追ってくるの？！

足をもつらせながら、必死で駆ける。

あの曲がり角を曲がれば、アパートが見える。

逃げ切れる。

そう思つて少し安心したのがいけなかったのか。

角を曲がった瞬間。

ずしゃっ

派手にこけた。

こんな時に不幸モード発動！？そんな、追いつかれるっ…！

恐怖で足がすくんで、立ち上がれない。役たたずな足。

もう、追ってきた誰かはこの角を曲がるかもしれないのに。

怖い。怖い。怖い。

ガタガタ体が震えだした。その時。

角を曲がって、男が飛び込んできた。

「きゃ……っ！…！」

悲鳴をあげようとした唇に、何かがぶつかってきた。

さっきの男だ！走ってきた勢いそのままにぶつかってこられて、私はふつとばされ……なかった。

あれ？

なんか、体を抱き込まれて…守られてる？そりゃあ、勢いすごかつ

たから軽く飛ばされたけど、男が腕を差し込んで地面との間にクッションになってくれたから、痛みは軽減されたみたい。

「わ、わるい！まさか転んでは思わなかった。大丈夫か？」

至近距離でわめく男。いや、近い。いやそれよりも、今…

「きす、しちゃった…」

ぶつかって、2人でふつとんで、衝撃にぐつと息が漏れて、その後、ふにやつとしたものが唇に。

目を開けたら、あらまあ、目の前に超イケメンが。

「……えっ」

不審者がイケメンでそのイケメンがぶつかってきて唇と唇がジャストにミートしちゃってふにやつとぶちゅっときすが…

「おろ？」

知恵里は目の前が真っ暗になった。

さら、と髪を撫でられる感覚。それとふにつ、と額に何か柔らかい物も触れたみたいな。

…また、髪に触れられる。今度は頬に柔らかい感覚。くすぐったつ…

「……んっー？」

すりすり、と擦りよってみる。そうすると。

ふっ…

低い声の笑い声。あれ、なぜだか聞いた事ある気が。しかもついさっきとか。

ぱちっ

薄目を開けてみる。白い天井。ダリアの花が広がったような、上品な照明。

私ん家、こんなオシャレライトあつたっけ？…あれ、照明の紐にくくりつけた、夜光くんがない。あのこ、電気消したら光るから大切にしてたのに。

「や、こっ…くん…」

ひも切れて落ちたのかな。

って言いたかったんだけど。

「……えっ」

がばっ、と何かにのし掛かられて。しかも上から両手を押さえつけられてしまった。

かち合ったのは、私を射抜くような強い眼差し。さっきのイケメン！？

「や、なに…っ」

「やこうくん、とは誰だ」

知らんがな。

「えっ、ちょっと…えっ？」

やばい。頭がパニックっているね！ニセ中国人みたいになってるし。

「いやいや、あなた誰？しかもここどこ？ていうか、離れて！」

近い！無駄に近い！

鼻先がふれあいそうな程近くに詰め寄られて、変にドキドキする。私、この年までお付き合い経験0のぴゅあーるなんですからね。

異性とこんな鼻息感じそうな程に距離詰めたの初めてですから。

「やこうくん、が誰か話したらどいてやる」

あなた、めちゃくちや偉そうですね。

「えっ…やこうくんは、暗いところで光る夜行性なステキ男子の人形、だけど…」

恐る恐る、イケメンの鋭い目を見ながら答える。私、とって食われそう。頭からがぶりと。

「……人形」

鋭い目が、険しい色を少し緩ませる。

「うん、人形ですね」

彼はそれ以上でも、それ以下でもないんです。

わかってくれたかな？と、イケメンをじつと下から（状況的に、そうなっちゃう）覗き込む。

はっ、と目を見開いたイケメンが、かあっと真っ赤になった。

うわ、耳まで赤くなってる。

イケメンは、しゅばつと勢いよく私の上から跳ね起きた。わお、勢いよすぎてベッドが、がたんって言った。

びつくりして、思わず私もベッドから上半身を起こす。
その時、右肘に鈍い痛みが走る。

「いつ…」

なんだろう、と肘を撫でると、湿布が貼つてあるみたい。

…そういえば、けっこう吹っ飛んだもんな私。このイケメン、どう
いう訳かかばってくれたとはいえ、打ち身くらいはあるよね。

まあ他はこれといって外傷はないみたい。軽く体を撫でて確認。

よし。

「で。……あなた、誰ですか」

跳び退いてベッドの端に居たイケメンを、きつと睨み付ける。…まだ顔赤いし。イケメンは、私と視線がかち合うと、私の足元にとす、
と足を折って座り、両手について頭を下げた。

「……………えっ」

土下座?...うん、土下座ですね。

どうしよう。今すぐこの場から逃げ出したい。

しかも、土下座するだけしといて、何も言わないしこの人。

なんかやつぱり怖い。

「あの...」

「俺と結婚してくれ」

居たたまれなくなつて、声を掛けたと同時に。
耳を疑う様な言葉が聞こえた。

いやまさか。聞き間違いでしょう。

嘘でしょう、という雰囲気相手が相手に伝わったのか、

「結婚して欲しいんだ。俺と」

もう一度、おっどろきーな事を言われてしまった。

「……………はい？」

「…それは、承諾してくれたと受け取って良いのか」

がばっと、頭を上げるイケメン。

いやいや、結婚とか嘘でしょう。なんだかおかしい方向へ進んでないですか。

「えっと、話がわからないんだけど…」

あれ、いつの間にか、イケメンがじりじり迫ってきてる。

ベッド上で後ろに逃げたはずが、とん、と背中が壁にぶつかる。

やばいかも…

今さらながら、逃げ場を探して部屋を見渡す。

白と黒で統一された、生活感のない殺風景な部屋。

奥の方に、茶色のドアが見えた。

あれは…玄関だ！あそこから逃げられる！

どうやら、ここはワンルームアパートの一室らしい。ずっと目の前のイケメンから目が離せなかったから、今頃周りの様子が頭に入ってくる。

逃げなきゃ、と体を起こそうとした瞬間。

とん、と肩を優しく壁に押さえつけられた。

はっとして私を壁に押し付ける腕の先を見ると。

ギラギラした、熱い眼差しとかち合った。

一瞬、その眼差しの強さに見とれて——捕まった、と思ってしまった。体がびくりと硬直するのがわかった。

だからなのかも、しれない。

「知恵里…」

掠れた声と共に、もう一度唇を重ねるのを許してしまったのは。

「んっ…や…っ」

熱い唇が押し付けられる。逃げて、また唇をふさがれて、吸い付かれる。

キスの合間に漏れる吐息が艶めかしくて、どんどん体が熱くなっていくのを感じる。

噓。こんなの知らない。

キスって、もつと可愛いものだと思ってた。こんな、激しくて、苦しいものだったなんて。

「や…っ！」

必死に顔を反らして、彼から逃げる。

ちゅっ、とリップ音を残してようやく私の唇は自由になった。

はあ、と吐息がこぼれた。キスの間中、ずっと呼吸が上手くできなくて、苦しくて仕方なかった。

彼は荒く呼吸を繰り返す私の髪を優しく撫でると、また唇を寄せてきた。

「やだっ」

押し返そうとする腕を掴まれ、拒絶の言葉を吐こうとした唇を再度ふさがれる。

びくつと、体が固まった瞬間に、唇を少し開いてしまった。それを逃さず、する、と何かが入ってくる。

！？

まさか…っ。

そんな、と思ったと同時に、入ってきたそれを噛んでしまっていた。

「…っ！」

口を押さえて、私から離れる彼。

舌に感じる血の味に、彼を傷付けた事を知る。

「わ、私…：謝らないっ、から、ねっ…？！」

ぜえぜえ息を乱しながら、彼を睨み付ける。

彼は、私を見つめたまま動かない。熱に浮かされた様な、うっとりとした目をしながら。

——ぞくつ。

寒気を感じたのは、絶対に気のせいじゃない。

「すまない……」

……？

イケメンの意外な言葉に、私は眉を寄せる。まだうつとりとした表情は変わらない。…言葉と表情にギャップがありすぎる。とても人に謝罪をしてる顔じゃない。

「知恵里はキス、初めてだったのか。…初めてじゃなかったら、相手を殺しているところだったか。…初めてだというのに、無理をさせて悪かった。息の仕方わからない、知恵里の初な反^{うぶ}応が可愛すぎて抑えがきかなくなってしまった。すまない…それと、俺を噛んだ事は気にしないでいい。お前の体内に俺の血が混じるだなんて…夢のようだ…」

——えっ…。

私、耳壊れたかもしれない。もしくは、脳味噌が沸いてしまったのかも。

だって、意味わかんないんですもん。

ぼけっと放心している私を、イケメン、いや、変態がそっと抱き締めてきた。

「いきなりで怖かっただろう…大丈夫だ、俺はこれ以上は知恵里がいいと言っただけで待つつもりだ。最後までいかなくとも、愛を伝える術はある。」

……はい？！

「今度の休みには知恵里のご両親に挨拶に行こう。結婚を真剣に考えている事を伝えておきたい。」

えっ？！

「ご両親の承諾がとれ次第、これを役所に出しに行こう」

さっきの艶っぱさとは大違いで、背後に花でも背負っていそうな笑顔を浮かべて、変態がベッド脇の書類棚からいそいそと白の封筒を取り出す。

更に中から二つ折りの紙を取り出し、ぺろんと私に広げて見せる。

…これ、婚姻届じゃないですか。しかも全部記入済み。（妻の記入欄に私の氏名住所生年月日その他諸々まで全て完璧に！判子まで押してある！）

——私、あなたに会ったのは今日が初めてじゃなかったっけ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3439y/>

助けてください。

2011年12月7日00時55分発行